

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM for WORLD PEACE

● CONTENTS ●

スポット

2

ミュージアムの収蔵品56

『愛国いろはかるた』

巻頭
つれづれ

3

「水は低きに流れる」

立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長
安斎 育郎〔立命館大学名誉教授〕

館長だより

5

過去の記憶と未来を迎える想像力

立命館大学国際平和ミュージアム館長
モンテ・カセム〔立命館大学政策科学部教授、立命館総長特別補佐〕ここが
見どころ

7

平和創造展示室：世界法廷を動かした地球市民

立命館大学国際平和ミュージアム副館長
山根 和代〔立命館大学国際関係学部准教授〕運営委員
リレー連載

8

心に平和をもたらすもの

立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
神子 直之〔立命館大学理工学部教授〕ミュージアム
おすすめの
一冊

10

金森俊朗 著

『いのちの教科書—学校と家庭で育てたい生きる基礎力』（角川書店 2003年10月刊）

立命館大学国際平和ミュージアム メディア・資料セクター長
赤沢 真世〔立命館大学スポーツ健康科学部准教授〕

ミニ企画展

11

開催報告（2013年2月～5月）

事業報告

12

- 2013年度 春季特別展 ジミー・ツトム・ミリキタ二回顧展—日系人強制収容所と9.11を体験した反骨のホームレス画家—
- 特別企画展示 丸木スマ展 —いのちをみつめて—
- ロビー展示 A Picture for Peace UNOY
- 第8回 国際平和・人権連続セミナー—平和の諸相を見る—
- 学生企画 Artによって児童労働をなくそう！
- NGOワークショップ報告（2013年 第1回）
- 夏休み親子企画「へいわ」ってなに？？2013

17

- 「キャンパスアジア・プログラム」
- ボランティアガイド養成講座修了式・学習会
- 2012年度 資料・図書寄贈者一覧
- 日本平和博物館会議加盟館の紹介・第7回 対馬丸記念館
- ボランティアガイド活動日誌
立命館大学国際平和ミュージアム ボランティアガイド・平和友の会 関谷 真樹
- 平和へのメッセージ
- 2012年度入館者状況（2012年4月～2013年3月）、編集後記
- ミュージアムインフォメーション

日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE立命館大学
国際平和ミュージアムKyoto Museum for World Peace,
Ritsumeikan University

『愛国いろはかるた』



1943（昭和18）年12月発行 7.2cm x 5.2cm

絵札、読み札それぞれ47枚あり、カラー印刷されています。

『愛国いろはかるた』は、1943（昭和18）年12月に、情報局認定、社団法人日本少国民文化協会制定のもと、社団法人日本玩具統制協会が発行したものです。

情報局とは、1940（昭和15）年に軍や省庁の情報関連部局を統合し、体制に反対する言論を取り締まって、賛同する世論を形成するために作られた政府機関です。大政翼賛会文化部など国策を宣伝する様々な下部機関を傘下におさめました。日本少国民文化協会は、1941（昭和16）年12月23日（当時の皇太子誕生日）に設立総会を開き、1942（昭和17）年2月11日（当時の紀元節）に発会したもので、情報局と文部省がその背後にあって子どもの文化を統制するための機関でした。

このかるたは、子どもたちに国の政策と遂行中の戦争に賛同する意見を持たせることを目的に作られたものです。

最初の7枚の札を見てみましょう。（文面は漢字に置き換えています）

- イ 伊勢の神風 敵国 降伏
- ロ 炉端で聞く 先祖の話
- ハ 「はい」ではじまる ご奉公
- ニ 日本晴れの 天長節
- ホ 誉れは高し 九軍神
- ヘ 平和な島々 日の御旗
- ト 東亜を結ぶ あいうえお

ご奉公…この文脈では、国のために尽くすことをさしています。意義を唱えず従うことが基本だったことがわかります。

天長節…天皇の誕生日のことです。

九軍神…真珠湾攻撃の際に戦死した9人の軍人は、命を捨てて攻撃したとして軍神とされました。

平和な島々…日本の旗が立った（日本が軍事占領した）島を詠んだものです。

東亜を結ぶ あいうえお…占領地域で日本語を教えました。

12月の発行は、お正月に遊んでもらうことも前提ですが、かるた同様にお正月の定番である百人一首にも、戦意を高揚したり天皇への忠誠を詠った和歌百首による『愛国百人一首』が発行されていました。『愛国百人一首』は国文学者などが古今の歌から選んだものですが、『愛国いろはかるた』の句は、一般から募集し、その中から選定したものでした。

1943（昭和18）年の雑誌『週報』334号には、以下のような募集記事が掲載されました。

日本少国民文化協会では、今回情報局、文部省、大政翼賛会後援の下に新作のいろはかるたを募集し、少国民に最も適切な愛国いろはかるたを選定することになりました。

内容 次代の日本を担い、大東亜の指導者となるべき少国民の気宇を雄大に、情操を清純にし、その日常生活を指導して忠君愛国の念を涵養するもので永く愛誦するに足るもの

程度 国民学校低学年の児童にも充分理解しうる、平易にして明朗なもの

この募集に対して、国民学校（当時の小学校）の児童を含め、26万通の応募があったとも言われています。

学校ぐるみでの応募がその数を押し上げたことは想像に難くないですが、限られた字数の中で言葉を工夫し、応募し、選定結果を待つ過程に組み込まれれば、関心や思い入れは強くなります。当初は消極的であっても、参加させてしまえば、後は自然と盛り上がりを見せていきます。アイドルグループの売り出しや、商品開発など、現在もこの原理が多くの人を動かしています。

総力戦となった一五年戦争では、さまざまな手法で戦意高揚を図る宣伝活動が行われました。今秋には、特に視覚や聴覚に訴える手法で、そうした宣伝が繰り広げられていた様子を紹介する特別展「目・耳・WARー総動員体制と戦意高揚」を開催いたします。

（学芸員 兼清順子）

「水は低きに流れる」

立命館大学国際平和ミュージアム

名誉館長 安 斎 育 郎

(立命館大学名誉教授)

■ 相変わらずの福島通い

2011年3月11日に発生した福島原発事故の影響は、被災者に今後数十年～100年単位で放射能と向き合う生活を強いるたいへん深刻な実態ですが、ただ嘆いても危険が去るわけではありません。すでに安斎科学・平和事務所は、“Fukushima Project”の一環として、2012年12月以来、福島市内の保育園の園児や保育者ら120人ほどの外部被ばく線量を継続的に測定するサービスを実施しています。「フクシマ」と聞くと「原発事故」→「放射能汚染」→「放射線被ばく」→「危険」という連想が働いて、「健康状態や社会生活に悪い影響があるに相違ない」と思い込みがちです。悪意があるわけではないにしても、時にはそのような思い込みが被災者に対する偏見や差別につながったり、被災地の産品に対する風評被害をもたらしたり、将来に対する被災者の不安をいっそう深刻化させたりしかねません。「事実を正確に把握すること」が、「事態を侮らず、過度に恐れず、理性的に怖がる」ための基本でしょう。

昨年来の保育園児らの外部被ばく測定の結果、少なくとも二つのことが示唆されています。第一には、被ばく線量は総じて昨年12月から今年の1月にかけて、いわゆる「除染」の効果を反映して減少したのですが、2月以降は被ばくレベルがまったく下がらず、ほとんど横ばい状態になっていることです。新たな有効な対策を実施しない限り、放射線被ばくのリスクは減りそうもありません。第二には、この地域の人々の外部被ばく線量は、平均的に原発事故の前より60～70%増大しているのですが、それでも合計の年間の被ばく線量は2ミリシーベルトに満たない程度で、「原子放射線の影響に関する国連科学委員会」が1988年に発表した世界の人々の平均的な自然放射線被ばく(2.4ミリシーベルト)を下回っています。その主要な理由は、日本では空気中の自然放射能濃度が海外に比べて少ないためですが、福島市に暮らしている人々が深刻なレベルの放射線被ばくにさらされていないのは不幸中の幸いです。しかし、事故前より60～70%増大した外部被ばく線量を何とかして減らし、リスクを極小化したいという強い思いで、私は毎月のように福島通いをしています。

■ 放射能も水とともに低きに流れる

福島市の保育園の園児たちが散歩するのに、どのコースをたどれば一番被ばくのリスクが少ないかを見極めるために、ある「優れもの」の助けを借りました。40年来の知己である桂川秀嗣さん(東邦大学名誉教授)を介して知る機会を得た2人のエンジニア(山口英俊さん、早川敏雄さん)が開発したとても心強い測定器があるのです。写真①のように、放射線検出器とGPS機能付きのパソコンを結合させた測定システムで、子どもの被ばくのことを考えて地上50cmほどの膝上部分に検出器をくくりつけ、測定したい散歩コースを歩き回ると、地図上に放射線のレベルが数値と色分けで表示されるのです。結果を一目すれば、どの道筋が放射線レベルが高いか低いか、すぐに分かります。



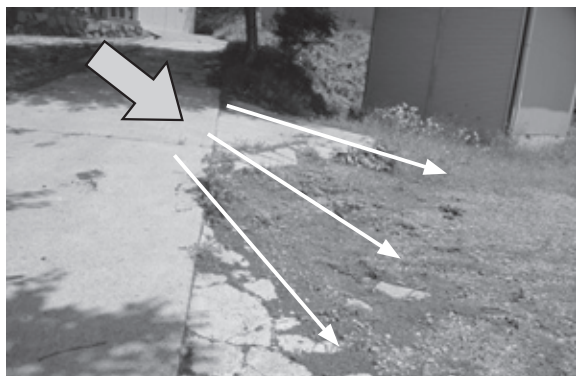
写真① 散歩コースの放射線を計測中の早川敏雄さん

この測定システムを携え、補助的にシンチレーション・サーベイメーターやGM管式サーベイメーターも使いながら環境中の放射能を調べたところ、とても常識的なことが三つ再確認されました。第一には、放射能は水とともに低きに流れるということ、その結果、第二には、閉じられていない雨樋の出口や、屋根からポタポタ雨水が落ちた軒下の場所などには高い汚染が見られること、そして第三は、降ってきた放射能はケバケバ、モジャモジャ、ザラザラ、ゴツゴツした所にしつこくくっついていくということです。

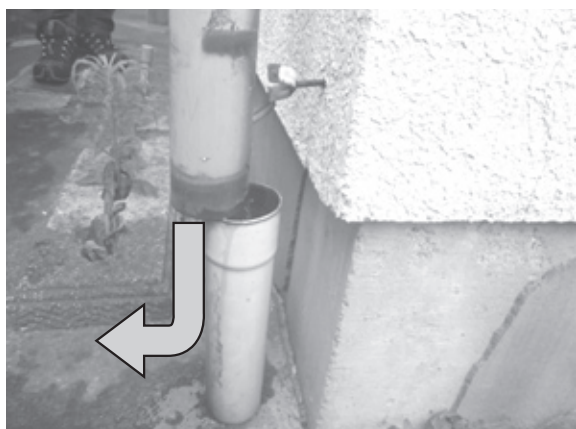
写真②は、ある傾斜地の様子ですが、図に示した矢印の方に放射能が雨水に含まれて流れ、汚染を残していった様子が観察されました。坂の上から流れてきた汚染雨水が写真のように道路脇の空き地を下ってい

き、舗装が剥がれた地面に放射能を染み込ませて、事故から2年あまり経過した今でも強い汚染を残しています。除染を実施するには、汚染のたまりやすい場所を見立てて、重点的に除染することが有効です。

写真③は、ある家の雨樋の出口が受け手側と接合しておらず、あたり一面が強い放射能汚染を示していた例です。手作業で簡単に雨樋を接合することができました。



写真② 放射能汚染水は「低き」に流れ、広がる



写真③ 雨樋がずれていて、汚染水が漏れ、広がった



写真④ 表面がザラザラの簡易舗装路は放射能が高い

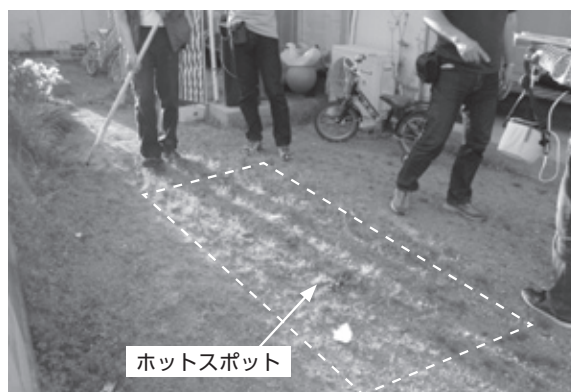
写真④は、川沿いの簡易舗装道路ですが、表面が滑らかではなく、細かい穴があいてざらざらした状態でした。穴に入り込んだ放射能はジェット水流ぐらいではとても洗い流せず、今でも高い汚染度を示しました。根本的には舗装のし直しが必要ですが、厚さ3cmぐらいの簡易舗装部分をはがして裏返しにするだけでも放射線のレベルは顕著に減るでしょう。実態を知ったら、実際に対策をとることが非常に大切です。

戸別の具体的な対策が大事

被ばく線量を測定してみると、被ばくが高い家族と低い家族があることが判明しました。そこで、被ばくが多い家族の家を個別に訪問して、なぜ被ばくが高いのかを調べ、どうすれば被ばくを減らせるかをアドバイスすることにしました。写真⑤は、被ばくが高めの値を示していたあるお宅についての調査結果ですが、子どもたちも遊ぶ庭の一角に放射能汚染のホットスポットがありました。この部分の土を3～5cmぐらい削り取って、人があまり立ち入らない場所に穴を掘って汚染土を埋めれば、おそらく被ばくは確実に減少するに相違ありません。福島でいま必要とされているのは、大金を投じて均等に除染することではなく、戸別の汚染状況に応じて実態に即した見立てを行い、被ばく低減に結びつく有効な手立てを確実に実施することでしょう。

被災者をサポートする視点

福島の人はずっと被ばくしているはずだとか、福島産の農畜産物はひどく汚染されているはずだとか根拠もなく決め付けるのではなく、実態をよく調べた上で、被ばくや汚染があればそれを少しでも少なくし、原発事故による放射線リスクを極小化するために具体的な対策を着実に実行すること—これが被災者をサポートする基本的な視点であるべきでしょう。



写真⑤ 庭の一角に放射能のホットスポットがあった

過去の記憶と未来を迎える想像力

立命館大学国際平和ミュージアム

館長 モンテ・カセム

(立命館大学政策科学部教授、立命館総長特別補佐)

■ パタゴニアの砂漠を思いださせた映画

20数年前のことだが、飛行機の窓から見たパタゴニアの砂漠の一部で黄色い砂嵐があり想像した通りの砂漠だったが、もう一部は灰色の砂利の風景だった。後者に関心が魅かれ、宇宙飛行士のアームストロング氏が月に降りる寸前の風景ではないかと思わせられるものだった。見渡す限りまっすぐ舗装されてない道路が、交差しながら地平線へ消えていく。自動車が時々小さく寂しく蟻のように走っているのをみて、車好きな私は「この厳しい環境で結構たくましく走っているな、どんな車種だろう」と思ったことを覚えている。ネウケン市の飛行場に降りた私を迎えに来ていた黒い車が上空から見たものと同じで、ちょっと車体が高いフォード社のファルコンと言う車種だった。その後一週間、この車でネウケンの後背地にあるパタゴニア砂漠の資源調査を行い、何回もこの過酷な環境でこんな仕事を私ができるのは頑丈なファルコン車のおかげだと思われ、心から感謝していた。だが私がファルコン車に対して持っていた気持ちと全く違った感情で、ファルコン車と出会った方がいたことをクリストファー・ハンプトン(Christopher Hampton)監督の2003年作映画「ジャスティス 闇の迷宮 *Imagining Argentina*」で気づかされた。

ローレンス・ソーントン(Lawrence Thornton)の小説から制作されたこの映画は、1976年から1983年の間、アルゼンチンの軍事政権の下でこの世から消えた、また消された1万から3万人の人々(スペイン語: desaparecidos、英語: the disappeared、「消える」という名詞を動詞化したことと言われている)の悲劇を物語っている。彼らを取り締まりに来たのは黒ではなく緑色のフォード・ファルコン車だった。この自動車はデス・モビル(Death mobile)とブエノスアイレスの市民に名付けられ、この車が表れたときの人々の心の怯え、感じた憎しみ等はいかに私の経験と違ったかと自覚させられた。映画の主人公は劇作家で、消えた妻と消された娘を探しに出る旅が中心で、大変残酷なシーンも多く、見るのが辛い時も少なくはなかった。映画は歴史を背景にしたフィクションであったが、その背景のなかのマーヨ広場(Plaza de Mayo)の母親たちの姿は印象的だった。消えた子供

たちの写真を持ち、静かに軍人の本部棟前で歩き続けた白いヘッドスカーフの母親たちの反抗は、最後にその運動を軽く見た軍事政権を倒すことに繋がっていたと言われている。希望を持てばどんな残酷なことでも超えられるが、その過程で大変な犠牲を払わなければならない。その希望の原動力としてあるのは、過去のよい思い出と、再び必ず来るよい未来を想像できるイマジネーションだというメッセージだった。



マーヨ広場の母親たち (https://www.google.co.jp/)

■ 悲劇の記憶の継承

このような事は過去のものであるから、国民の記憶から消したがることも分からなくはない。しかし、いまだにマーヨ広場を歩き回った女性たちはがんばっている。消された方々の消えた子どもたちを探し、元の家族に戻す努力をしたり、その悲劇で犠牲になった子どもたちの戸籍を回復させ、その人道的行動を続けていることによって、アルゼンチン社会の記憶に悲惨な歴史を焼き付けている。武力紛争後に平和を取り戻しても、記憶の継承の重要性をこの女性たちの姿勢が語っている。軍人が1970年代に人を拉致させた行動は、アルゼンチンの歴史を遡れば過去にもあったと言われている。ブエノスアイレスの労働運動を1919年に残酷な暴力で抑えた「悲劇の一週間」(スペイン語: Semana Tragica、英語: Tragic Week)は内乱になって、1921~1922年の間パタゴニア地方まで広がり、そこの農村労働運動の始末の手段として、当時の軍事政権が疑わしいと思った民を大量に拉致して殺したようである。50数年続いた民衆化の歩みはここで止まったと言える。この時の民の苦しみから、フアン・ペロン(Juan Peron)の大衆政治感が生まれたとも言える。軍政と民政を繰り返したアルゼンチンが、元軍人ペロンに対して持っている憧れのルーツもここにたどり着く。1970年代のアルゼンチンも同様に経済が悪化し、民が社会変革を求めている時だった。日本の歴史で大正デモクラシーが誕生して消えて行ったあ

たりはアルゼンチンより短かったが、幾つかの共通点があると感じる。

まさに歴史が繰り返される恐れがあるからこそ、我々が時代の流れに敏感にならなければならない。悲劇の記憶を記録することはそこで重要であり、立命館国際平和ミュージアムでの一五年戦争の展示や過去の歴史と誠実に向き合うことの重要性を強調できる。だが今日の社会変革に敏感になるのには、どうすれば良いだろうか？これはわがミュージアムの10周年記念事業で新たに導入した戦後の社会の展示で取り組んでいるが、今度の20周年を記念したりリニューアルの時も引き継いでいる課題でもある。辛い時に素晴らしい時代が先に待っていると「未来を信じる」思想、行動の重要性は、立命館の建学の精神や歴史的取り組みにも表れているといえよう。実にこのことは今日、数多くの国々や地域での平和構築の原点である。過去であろうが今日であろうが、どのように未来創造を可視化して民に見せ、希望を湧かせられるかが社会に求められている。わがミュージアムの平和構築の展示や教育・研究活動もこの期待に応えなければならない。

■ 未来創造と平和構築

私の母国スリランカで30年近くに渡った内戦が4年前多くの血を流して終わったとき、国内避難民のキャンプ生活者は27万人ほどいたが、今は6000人未満だと聞いている。数多くの方が社会復帰できたことは嬉しい。政府軍がこの避難民と住宅建設に協働し、良いこともたくさん行っている。日常化していた武力紛争や様々な暴力の行為も見えなくなっている。だが見えないからなくなっているかというのは別問題であり、アルゼンチンのグリーン・ファルコン軍の様にスリランカでホワイト・バンが誕生し、政府批判者が急に消えているとも言われている。報道人が特に多いようである。この様なことがなぜ起き続けているのか。歴史と誠実に向き合っていないからだろうか？スリランカのLessons Learned and Reconciliation Commission (LLRC) という委員会報告ではどうすべきかが書いてあるが、なかなかその実現は困難のようだ。これは発展途上国の政治的指導者が未熟であるからだろうか？ヨハーン・ガルテュング (Johann Galtung) 氏が指摘している「構造的暴力」、社会構造の中に根を張っている暴力、差別等ははまだスリランカの社会から排除されてないと考えられる。武力紛争が終わったスリランカにはまだ平和的行動が社会構造の中に根付いていないとも言える。人々が怯えず暮らせる環境をどう日常化できるかは重要で、変換期の平和構築の課題とも言える。

だが社会的変換期に出る矛盾は、スリランカの様な未成熟社会の課題だけではない。平和を望む市民の期待に応えるのであれば、転換期の変容する情勢に敏感にならなければならない。ここでコロッサス (Colossus) の発明家の悲劇を思い出す。数多くの方が世界初のプログラミングできるデジタルコンピュータはエニアク (Eniac、米国、1946) だと思っていると思うのだが、実はコロッサス (英国、1943) だった。コロッサスのおかげでドイツ軍のローレンズ (Lorenz) 暗号が解読でき、連合国軍が第二次世界大戦で勝利したと言われている。だが平和を取り戻した後もコロッサスのことは軍事秘密として固く守られ、近代情報科学技術の起点になる電算機をばらして処分し、発明家の電気技師トミー・ファウラー (Tommy Fowler) と暗号解読をしたウィリアム・タット (William Tutte) やブレッチリー・パーク (Bletchley Park) のチームの仲間の功績は英国政府の軍事秘密保持法の裏に隠される。

1980年代の半ばに米国の秘密保持文書が情報公開され、コロッサスの発明家が基調講演をアメリカの大学で頼まれたとき、英国では同法がまだ有効で、この科学者たちの偉大な業績を社会に向けて発表することを禁じられた。終戦間もない時に発表されていたら、英国のコンピュータ産業にどのような影響を与えただろうかと想像することしかできない。社会的変革に敏感ではなかった一つの例として取り上げられている。最近この物語は本になって出版されている。大憲章が生まれた国であり、戦後の平和基盤構築や議会制民主主義の広がり大きく貢献した英国に、このような悲劇が起きたことは教訓だ。

今日の日本社会も大きな転換期を迎えていると感じる。憲法9条の改正、自衛隊の役割、環太平洋パートナーシップ (TPP) の参画等が話題になっている。日本国民の多くの参加のもとに、解決策や方向性を決めて行く時期とも言える。この様な責任を果たすのに立命館大学国際平和ミュージアムの様な組織はどう貢献できるか？いま日本の国民所得の過半数は海外で生み出され、新興国で投資した成果が大きいと聞いている。同じ新興国は世界の最貧層も多く持ち抱えている。この様な状況が社会的不安を起こさないために、どんなことをやるべきかを日本の開発協力や投資戦略の課題にしていかなければならない。ミュージアムの平和構築の展示で理性と感性に訴えるものを企画し、市民が転換期の課題に敏感になれるようにしなければならない。この様な課題をミュージアムの第三ステージ・プランの討論に取り入れることは重要と言える。

平和創造展示室：世界法廷を動かした地球市民

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 山根和代

(立命館大学国際関係学部准教授)

国際平和ミュージアムの2階に「平和をもとめて」というテーマの展示室があります。そこには「国連と地球市民としてのNGOの役割」をテーマとした展示物などがあります。その中に、核軍縮・核廃絶をめざす「世界法廷運動」に関する説明があります。

1992年から1996年にかけて、国際反核法律家協会、核戦争防止国際医師会議、国際平和ビューロという3つのNGOが「世界法廷運動」に取り組みました。核兵器の威嚇・使用が国際法上許されるかどうかの判断を、オランダのハーグにある国際司法裁判所（世界法廷）に求めるものでした。現在国連事務総長の潘基文（パン・ギムン）氏の軍縮顧問をしているケイト・デュース博士（ニュージーランド）が被爆者の話に衝撃を受け、リチャード・フォーク氏（米国プリンストン大学国際法名誉教授）と何とかしたいと考えているうちに、世界法廷プロジェクトについて考えが浮かび、取り組みを始めたそうです。

その背景として、1945年から1995年の間に、アメリカ、イギリス、フランスが、太平洋の島国およびオーストラリアにおいて、317発の核実験を行ったことがあります。そのため健康および環境への影響についての市民の関心が高まっていたのです。

1986年にニュージーランドの市民が発案した世界法廷プロジェクトは、国際平和ビューロを通して国際的な運動に発展しました。世界法廷プロジェクトでは369万の署名を集めた世界の草の根の市民運動と核兵器保有国に批判的な非同盟諸国の力がひとつになり、国連を動かしました。日本から333万の署名が提出され、日本の被爆者や市民が大きな役割を果たしたのです。

1996年7月8日に、国際司法裁判所は、次のような歴史的な決定を下しました。

「一般的に、核兵器による威嚇およびその使用は、武力紛争における適用可能な国際法の諸原則、とりわけ人道法の諸原則および諸規定に違反するものである。」そして「厳格かつ効果的な国際的コントロールの下で、核軍縮の完全実施へと導く交渉を誠実に追求し、その交渉を結論に至らせる義務が存在する。」

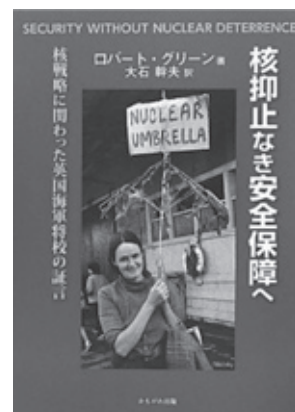
1993年に私がイギリスに留学していた時、ちょうどロンドンで国際平和ビューロ（1910年ノーベル平和賞受賞）の大会がありました。その時世界法廷プロジェクトの代表であるロバート・グリーン氏に出会いました。彼は元英国海軍中佐で、その後世界法廷プロジェクトの発案者であるケイト・デュース博士と結婚し、ニュージーランドで軍縮安全保障センターを立ち

上げられました。彼の著書として、『検証「核抑止論」—現代の「裸の王様」』（高文研 2000.11）や『核抑止なき安全保障へ—核戦略に関わった英国海軍将校の証言』（かもがわ出版 2010.8）などがあります。その大会でケイト・デュース氏とも出会いましたが、大会後の交流会で撮った写真があります。イギリスで反核平和運動をしている女性が、三人の息子に虹色のベレー帽を下さいました。その後ケイトさんは日本各地をマーシャル諸島の女性と講演旅行をされ、高知市の平和資料館「草の家」にも来られました。その際高知県の被爆者のインタビューをしたいとのことで、私は彼女に協力したことがあります。

核軍縮・核廃絶をめざす「世界法廷運動」に関する展示では、世界各地の市民が交流し、連帯すれば大きな力を発揮することができることを学ぶことができます。展示を見た後、ロバート・グリーン氏の著書を読んでみると良いと思います。



後列左からロバート・グリーン氏、ケイト・デュース氏、一人おいて筆者
(1993年10月9日 ロンドン ウェストミンスターホールにて)



『核抑止なき安全保障へ—核戦略に関わった英国海軍将校の証言』
ロバート・グリーン 著・大石 幹夫 訳（かもがわ出版 2010年8月刊）

心に平和をもたらすもの

立命館大学国際平和ミュージアム

運営委員 神子直之

(立命館大学理工学部教授)

■ 心の傷、心の平和

世界の様々な国で紛争が起り、国内でも人が見知らぬ人を刺す事件が続いています。コンビニのパンには針が挿入され、年間自殺者数は3万人弱と報告されています。今の私達の状況は果たして平和と呼べるのでしょうか。この世の中で生活している私達の平和は、一体どこにあるのでしょうか。

私達は必ず自分以外の他者と関わり合いながら生きています。そんな中で私はどれほどの人を傷つけて生きて来たのだろうか、と時々考えます。親を、友人を、先生を、同僚を、家族を、そして見知らぬ人を、数限りなく傷つけてきたと思います。一方で、傷つけられても来た。心の傷には、一瞬で回復できる軽微なものから、もう立ち直れない、と思ってしまう重篤なものまで、様々な重みのものがあります。一時的な痛みを生じる程度の傷であれば、他者との関わりとの記憶として大事にされるべきものなのかもしれません。ただし、致命的な傷を生じさせる紛争は避けなくてはなりません。

傷つけたり傷つけられたりするのはなぜでしょう。自分が生かされているこの世の中において、自分のしたいことやすべきことが、他者のそれと相容れない場合に、片方あるいは両者の意にそぐわないことになります。そして傷つきます。心の傷以外に拡張すれば、自分以外の他者から受ける作用が、自分の許容範囲に入らなかった時に、傷つくことになります。ですから、心の傷やそれ以外の傷の大きさは、その作用の大きさと許容範囲の相対的關係によって決まる、すなわち、傷の大きさの半分は自分が決めていることになります。ただし、作用が大きすぎて人間という物理条件を越える場合には、自分ではなく人間であることが傷の大きさを規定していると言えるかもしれません。

例えば、今日の夕御飯の献立を家内に相談したとします。「今日の昼、海鮮どんぶりだったから、肉が食べたい。」「今夜は焼き魚よ。」で、私が微妙に心にモヤモヤを感じる程度の紛争とその終結が見られます。また、しばしば報道されるように他国の船が領海を侵犯していることに端的に現れる領土問題のような紛争

の火種や、今は姿を消したかに見える公害問題とその後の様々な環境問題は、私達の心の状態を平和からいく分離れた位置に動かします。

ここで、紛争において自分の心の平和を乱す他者は、実際的にどうかは置いておいて、すべて交渉可能な存在です。一方的な攻撃の場合にも事前折衝が可能だったかもしれません。家内には出張時のおみやげくらいで何とかすることが可能ですが、他国の場合は国家の粘り強い交渉が必要となり、環境の場合一見交渉可能に見えませんが、環境汚染の多くの原因が人間活動であることを考えると、交渉が可能であることとなります。この時の交渉相手は、自分を含む多数からなる他者なのです。

交渉を行って得られる到達点は、妥協点を見出して傷の大きさを社会的に最小化する最適化問題を解くことにあります。そこで、傷の大きさを定量化する必要が生じますが、夕御飯の献立が単なる嗜好の問題なのか、栄養バランスを考えてのことなのか、経済状態の点ではどうか、というふうに多岐にわたる事柄を考慮する必要が生じます。領土問題はなおさらで、諸国の利益、国際貢献等を踏まえての最適化、環境問題も原因と経済成長と損害の大きさを考慮しなくてはならず、どんどん不明確なものになってしまいます。

まともに考えても難しすぎるので、ここでは傷を社会的に最小化する立脚点として、人間が食べ物を食べ排泄して70年かそれ以上生きる生き物である、ということ、それに加えて、心を持っている、ということだけ挙げておきます。それゆえ、コミュニケーションもそのような人間の物理条件を踏まえることとなります。心の存在をその場で認めるのであれば、文化的条件を含める必要があるかもしれません。そして、傷を最小化したことで、私達が得られるものは何なのでしょう。それは、自分の本来の時間の過ごし方を心の痛みや邪魔なものが無い状態にすることでしょう。深く論じることはできませんが、命を生き生きと燃やせる状態を維持できることが、人の心の平和なのだと思います。自分の許容範囲を広げること、そして他者とのコミュニケーションが自分の心の平和を作るのです。

■ ジャズというコミュニケーション

音楽は芸術あるいは娯楽の一つと位置付けられますが、その中にジャズというジャンルあるいは行為があります。ジャズの起源には諸説ありますが、何か適当に音を出していたら楽しい、という音楽の基本的原則から生じたことは間違いありません。そこから発展した方法論に則って、主に西洋製の楽器を用いて合奏あるいは独奏するのが現代ジャズの形態です。

代表的なジャズの方法は、まず和声進行が概ね決められた主旋律（これをテーマと呼びます。）を、主旋律担当者（4人で合奏する場合にはサクソやトランペット等の管楽器である場合が多い。3人の場合はピアノかギター。）が1回、伴奏者（管楽器の伴奏はピアノあるいはギターと、ウッドベースとドラム。ピアノかギターが主旋律の場合はウッドベースとドラム。）の伴奏を伴って演奏します。次には、主旋律の伴奏となった和声進行上に、合奏者の全部あるいは一部が一人ずつ好きなように好きな回数旋律を奏し（これをアドリブと呼びます。）、他の合奏者に交代して行き、最後にもう一度主旋律担当者が主旋律を演奏します。このアドリブが一般的にはジャズの聴きどころで、瞬時瞬時に演奏者が何を感じどのような音を出したのか、合奏者の伴奏（これも、和声進行の決まりの上で自由に演奏して良い。）をどう受け取ったのか、そのような相互作用の音になった結果が人の心を動かすのです。

ジャズに内在するコミュニケーションには、同時に演奏している合奏者相互のもの、演奏者と聴き手、さらには作曲者と演奏者、演奏者とその友人や他人（との関係によっても演奏内容は左右される。）、作曲者や演奏者と音楽制作者とのコミュニケーション等様々なレベルのものが 있습니다。それらの目的は一体何なのか。何かの紛争を解決し、心の傷の大きさを決める、あるいは社会的傷の大きさを最小化することが目的とされないのは自明ですが、そうだとすると無目的なのか、あるいはコミュニケーション自体が目的なのではないか、と思ひ当たります。その目的は役に立たないようにも見えますが、ジャズというコミュニケーションに関わることによって、心の許容範囲が広げられ命を生き生きと燃やせる状態に寄与する、あるいは人の心や人生を、豊かにすることに寄与できるのかもしれない。

■ 環境工学にできること

本学にお世話になるようになって7年目、国際平和ミュージアム運営委員を仰せつかって2年目になりますが、普段は理工学部環境システム工学科で授業や研究指導をしています。主な研究テーマは水道水の高品質化技術の開発で、例えば紫外線を水に照射してどのような効果が得られるのか、実験的に検討しています。それ以外にも、環境に優しくしたい気持ちがどうして環境に優しい行動に結びつかないか、アンケート調査と統計解析を用いて調べています。

例えば、学部2回生配当科目「環境指標」で、「水道水を飲みそれが原因でお腹をこわす人が1日あたり何人に一人なら許せると思いますか。」というアンケートをとったことがあります。101名の有効回答のうち、14名が「水道水でお腹をこわすのは絶対ダメ」と表明、その他は10人に一人（3名）から60億人に一人（1名）で、最頻値は1万人に一人（16名）、幾何平均は約8500人に一人「なら許せる。」という結果でした。

このアンケートの意図は、理想的な状態を得るためにはコストや手間を代わりに差し出す必要があり、ある点で理想と現実の折り合いをつけるのが工学的ものの見方である、と気付いてもらう点にありました。実際の水道原水（河川水、湖沼水あるいは井戸水）には感染性微生物が必ずある程度の濃度で存在している現況において、お腹を絶対にこわさないようにするには、塩素注入率の増大による消毒の強化、それに伴う浄水コスト増大（あまり大きくはありませんが。）、水道料金値上げ、水のカルキ臭増大による水の品質の悪化、あるいは浄水器義務付け等の手立てが必要になります。それは今の現実社会では安易に求めてはいけないものなのです。それを15%弱の学生が求めるとは、私の授業が不十分だったのかもしれない。

人間の物理的条件と自分も含まれる環境という他者を、経済的あるいは技術的条件を踏まえてその相対的關係を考える、というセンスが、環境を工学的に扱う上で重要なものであると考えています。どれだけ手間暇や費用をかけるか、で交渉が可能な他者なのです。環境に自分の命を燃やすベースラインを少しでも害されないように、心の平和を維持できるように、頑張っていくのが、私達を含む現代人の、特に環境工学を扱う者の責務だと思います。

ちなみに筆者は時おり、京都や東京のライブハウスでジャズピアノの演奏をしています。

『いのちの教科書—学校と家庭で育てたい生きる基礎力』

金森俊朗著（角川書店 2003年10月刊）

立命館大学国際平和ミュージアム
メディア・資料セクター長 赤沢 真世
(立命館大学スポーツ健康科学部准教授)



この度、国際平和ミュージアム「メディア・資料セクター長」に就任させていただくこととなりました。運営委員として2010年4月着任よりBKCでの平和ミュージアム利活用について微力ながら活動をしてきましたが、今後はミュージアムのさらなる充実に貢献できるよう頑張りたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

スポーツ健康科学部では今年度1回生全員が「基礎演習」という授業においてミュージアム見学を行いました。展示されている写真や展示物はそれだけで何かを語りかけてくる威力があるのか、事前学習で「僕たちの世界は平和だと思う」「私たちには関係ないと思っていた」と感想を挙げていた学生も、熱心に説明書きを読んでいた。次世代を担う彼らが、スポーツ・健康を通して平和創造を考える第一歩になったと感じています。

一方で、見学はやはり第一歩でしかありません。その事前や事後に、もっと言えば、小学校、中学校、高等学校という学校教育の中で、戦争や平和について、あるいは生きることや命について、さまざまな文脈で丁寧に学習している必要があるとも感じます。例えば立命館学園の附属校では、継続的に丁寧に平和学習が行われています。そうした土台があるか否かでは、見学による学びの深さも変わってくると実感しています。

そうした思いから、今回は、小学校現場で命の学習を丁寧に実践されていた金森俊朗・元小学校教諭の著書『いのちの教科書』を紹介します。

金森氏は、生きづらさを感じる現代の世の中で、「人権軽視、弱者いじめ、自己中心的な行動、犯罪、リストラ、環境破壊、戦争などの問題に社会の形成者としてどう立ち向かうか、大人の生き方が、今子どもたちによって問われている」とし、そんな状況下だからこそ「子どもと、親や先生が共に創り合っていきたい大切な学び」があるとします。それが、「私、友、家族そして人間とは、世界にたった一人の個性的で奇跡的な存在なんだ、といのちをとらえる学びです」（括弧内全て22頁）と言います。

こうした考えのもと、本書には、金森学級における命の学習の具体が子どもたちの感想や先生の思いとともに綴られています。「末期がん」の患者を教室に招いた「死の学習」では、死に直面し、ぎりぎりの状況において生きることの意味を問うている人に直接子どもに語ってもらう機会を持ちます。そこから、祖父の死という自分自身に関わりのある「死」を語りあったり、自分が抱える深い根本的な悲しみ（子どもながらも死を意識した経験）を引き出し、子どもたち自身の経験と死を結び付けていくことを重視しています。

また、10歳を迎える4年生では、二分の一成人式ということで、父母や祖父母に話を聞き、自分史を人体図に纏める活動が行われています。その際には、例えば自分が生まれた時、難産で命の危機があったことや、祖父母が戦争で命を失う危険と隣り合わせの中、無事であったからこそ今の自分が存在することについて知ります。自分の命の重みや、戦争は自分と無関係では決して無いことを考えるのです。こうした学習が歴史における戦争学習の土台としても位置づくのでしょうか。

食べ物の命を奪い、私たちが「生かされている」ことを学ぶ学習では、給食のメニューに含まれている食品のルーツを探ることから、二ワトリを自分たちで屠殺して食べる実践にまで発展しています。死んだ動物が土に還るところを観察したりもします。こうした学習のなかで、自分たちも日々動植物の多くの命を貰い、親から受け継いだ「命のリレー」の一つのバトンを受け取り、「生かされている」ことに気付いていくのです。

本書から改めて学ぶのは、第一に、自分自身が「奇跡的な存在」であり、「生かされている」と感じることで、平和創造への第一歩であるということです。どの個人も「命のリレー」の走者であり、バトンをつなぐべく生きているのです。

第二に、人やもの、ことに真摯に向き合い、「自分自身の問題として」全身全霊で感じ、考え、生きた言葉を発することこそ、本当の学びであるということです。平和教育という側面で考えてみても、こうした学びをこそ、丁寧に積み重ね創っていく必要があると強く感じます。

最後に、メディア資料室では、学校現場での平和学習でも活用できる資料が豊富に取りそろえられています。児童・生徒が、自分の命との関わりを感じる資料をぜひ見つけていただけたらと思っております。また、ミュージアムでは、「教材キット」（手に取れる展示物、指導事例のセット）もあります。ミュージアム見学と合わせて、事前・事後学習に是非ご利用ください。

開催報告 (2013年2月～5月)

第78回 「京都青春時代—学生と戦争の風景—」 2013年2月9日(土)～4月7日(日)

今回は国際平和ミュージアム1階にあるメディア資料室の学生スタッフ5名による企画でした。学生たちは職員のアドバイスをを受けつつ、それぞれ得意分野を担当しながらテーマの選定、資料調査、展示構成、広報、設営までのすべての工程に取り組み、半年間かけて作り上げました。

展示は四つのテーマから成り、当時の学生の愛用品や愛読書、娯楽に興じる写真などの紹介の他、会場の一角に学生の部屋を再現して書籍や日記など手製のレプリカを並べ、手に取って見ることが出来るようにしました。また当時の様々な思いが記された日記に光を当て、学生生活を謳歌する一方で、戦時下に生きた学生たちの苦悩し葛藤する姿を浮き彫りにしました。それは歴史学的に見ると当時の学生の一側面ではありましたが、現代を生きる学生たちが、戦時中、同じ京都に学んだ学生と時空を超えて出会った意義はとて大きかったと思います。趣向を凝らした内容はテーマとともに好評で、会期も大幅に延長しての展示となりました。

学生から

私は学徒出陣で戦死された方の日記を通じて、当時の学生が「戦争」をどう捉えていたのかを担当しました。日記には戦争への批判や敗戦を知りつつも戦争へ向かっていく心情から、「死」を戦争の中で意識し、虚無感や「死」に対する恐怖心が綴られていました。

学生スタッフとして資料を整理する中で考えさせられる事が多くありました。今回のような展示を通じて、実際に自分が感じた事を伝え、「戦争」や「時代」について考えてもらえる機会を持てた事は貴重な経験になりました。

(文学研究科M2回生 山口一樹)

今回ミニ企画展の企画・準備に参加して、とても貴重な経験を得ることができたと思います。

企画テーマである京都の学生は、いわば私の70年以上も先輩にあたります。そうした人々が戦時下において、どのような生活を営み、何を考えて行動していたのか。当時の日記や写真をみると、今の学生と共通する部分や異なる部分それぞれあり、興味深く感じました。同時に今の自分と同じ立場の人が、戦争に行かなければならなかったという事実を改めて認識することができました。

最後に、他の学生スタッフや職員の方々や企画を無事成功させることができて本当に良かったです。ありがとうございました。

(文学部4回生 原田直哉)

今号では2013年2月から5月の間に開催しましたミニ企画展示をご紹介します。

企画した学生のみなさん(学年は開催当時)

野間るり(文学部4回生:「読書」担当)
関りん(映像研究科M1回生:「娯楽」担当)
山口一樹(文学研究科M1回生:「戦争と学生」担当)
原田直哉(文学部3回生:「学生生活」担当)
布谷達朗(文学研究科M1回生:「キャプション」担当)



打ち合わせの様子



設営の様子

第79回 「チベットの風とともに」

2013年4月13日(土)～5月8日(水)

写真展を主たる活動とする写真家 富樫浩之氏による展覧会が開かれました。富樫氏が訪れたアバは2008年のチベット暴動発祥地でもあるアバで、現在は外国人が訪れることも容易ではなくなっています。日本と中国を行き来する中で、チベットと中国、また中国と日本の間にある社会問題や文化の違いを経験した富樫氏は、「日本人の自分に出来る事は何なのか」を考え続け、そのひとつの答えとして今回の写真展を企画しました。

会場にはチベットの人々の日常をとらえた写真(2010、2011年撮影)を中心に、友人のタシ・ドルジ氏が近年撮影したものを加えた約30点の写真と、チベットの民族衣装や装飾品、仏具などが展示されました。展示を通してチベットの今を伝えるとともに、人々が営む生活・文化を知ること、多国間の諸問題を越えて人々が交流し、平和をつくり出すことの大切さを感じていただけたのではないかと思います。



会場の様子

ジミー・ットム・ミリキタニ回顧展

— 日系人強制収容所と9.11を体験した反骨のホームレス画家 —

会 期：2013年5月14日(火)～7月20日(土)

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール

参 観 者：9,330名

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム

監修・協力：米山 裕（立命館大学文学部教授）

協 力：ウィング・ルーク博物館（アメリカ）、原爆の図 丸木美術館、リンダ・ハッテンドーフ
広島市市民局文化スポーツ部文化振興課、山根和代

後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会

京都市内博物館施設連絡協議会、KBS京都、朝日新聞社、京都新聞社
毎日新聞社、読売新聞大阪本社



公開記念 上映会とカフェ

日 時：2013年6月15日(土) 12:00～14:00

内 容：映画『ミリキタニの猫』上映会

（監督：リンダ・ハッテンドーフ、2006年、アメリカ）

会 場：立命館大学衣笠キャンパス 充光館地階301教室

解 説：米山 裕（立命館大学文学部教授 アメリカ史・日系移民史

立命館グローバル・イノベーション研究機構（R-GIRO）

「第二次世界大戦による在外日本人の強制退去・収容・送還と
戦後日本の社会再建に関する研究」代表）

和泉真澄（同志社大学グローバル地域文化学部教授）

参加者：224名

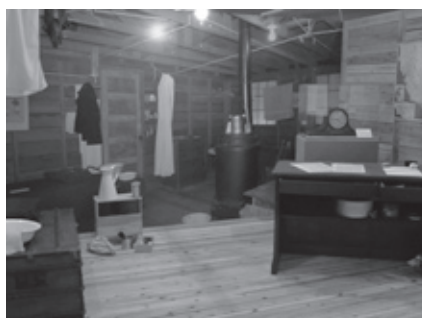


2013 年度春季特別展ポスター

上映会終了後、映画や特別展について語らう時間をもっていたきたいとの思いから、当ミュージアムの隣接カフェ「Roy's Garden（ロイズ・ガーデン）」で利用できる優待券を配布する新しい試みを行いました。



展示会場の様子



収容所の再現



解説をする米山裕教授

ジミー・ットム・ミリキタニ（1920-2012）は、第二次世界大戦中のアメリカで日系人強制収容を体験しました。晩年は、ニューヨークの路上で暮らすホームレスとなりながらも、アーティストとして生き、愛らしい猫やトラ、ツール・レイク収容所や故郷ヒロシマの被爆の様子を描きました。

2011年に起きた9.11事件を機にドキュメンタ

リー映画監督のリンダ・ハッテンドーフとの交流が深まり、彼の存在と作品は映画『ミリキタニの猫』として日本でも知られるようになりました。

今展では、ジミーの作品30点を展示するとともに、彼が20代前半の3年間を過ごしたツール・レイク収容所の一部を再現し、ジミーが直面した歴史について解説しました。

また、6月15日（土）には、衣笠キャンパス充光館地階301教室にて、映画『ミリキタニの猫』上映会を開催し224名の来場者がありました。

解説には、同志社大学 和泉真澄教授と、本学 米山裕文学部教授を迎え、和泉氏からは、第二次世界大戦中に「敵性外国人」として日系人が収容所に強制収容された経緯や、収容所での厳しい生活、また、アメリカに忠誠を誓わなかった日系人がどのようにツール・レイク収容所へ隔離されて

いったかについて解説がありました。

更に米山氏からは、「映画を通してジミー・ットム・ミリキタニの理解を試みる」という観点から、鑑賞する上でのキーワードやポイントについて解説があり、「ドキュメンタリー映画は、客観的な事実が描かれていると考えがちだが、批判的に観る視点も忘れずに、ジミーについて改めて考え直す機会として欲しい」と締めくくり、来場者はその後上映された映画に見入っていました。

特別展見学者の感想より

- 映画の一部で、燃えるワールドトレードセンターを背に絵筆を走らせるミリキタニ氏の姿が非常に印象的で、とても興味をひかれました。日系人とは思わず、びっくりしました。日系人収容所のことは存在を知っていましたが、アメリカへの忠誠、非忠誠のことなど、知らないことがたくさんあって勉強になりました。

（50代女性、主婦、大阪府）

- 日系人強制収容所の事実を初めて知り、また9.11の時にアラブ系アメリカ人が同じ境遇に立たされるのではないかという被害者たちの懸念があったということに価値観の変化を自覚した。

（20代男性、本学学生）

- ホームレスの画家という言葉に興味を持ち来ました。平和をコンセプトにするミュージアムとして、いろいろな視点で平和を考えることができる内容でした。なにより作品自体の魅力が強く印象に残りました。

（20代女性、学芸員、滋賀県）

- 映画『ミリキタニの猫』で、この強烈かつ個性的なおじいちゃんを知り、旅先のシアトルでも偶然猫の絵を見て、あふれんばかりの力強いパワーとエネルギーの中にちらりと潜む、温かいまなざしに心を打たれ、更にファンとなった。残念ながら昨年秋にお亡くなりになったが、好きなことを貫き、周囲を若干とまどわせながらも次第に巻き込み、いつしかみんなに愛される余生をおくったおじいちゃん、これはまさに大往生。追悼のために本日こちらを訪れ、様々なテーマやタッチの作品に触れ、収容所生活の様子も垣間見ることができ、おじいちゃんの心の奥底の闇と希望、平和へのまっすぐなメッセージを感じられてとてもよかった。

す。No War, Make Peace!!

（40代女性、会社員、大阪府）

- 映画が見たくなかったので機会があったら見逃さないようにしたい。米国に渡った日本人のことを知りたくなった。戦前一戦中一戦後、どのような暮らしだったのだろう。ホームレスであったとしても、人生をご自身の思いの通りに全うされたジミーさん。彼のように生きることが、はたして現在の日本で可能なのか？高い精神性を持って、日々生きていきたい。

（40代男性、自営業、京都市）

- 非常に素晴らしい展示会でした。分量や配置も適切で、貴重な資料（質問表や面接の再現）も、わかりやすく助かりました。京都市内の地図で収容所の広さを表わした展示で、どんなに広い収容所だったかわかりました。カトリーナのカラーージュが印象的でした。自身もホームレスであるのに、カトリーナの被害者にくぐばりをされているように感じて、感動しました。

（20代女性、大学院生）

- 足を進めるにつれて、もし自分が当時の日系アメリカ人で、強制収容所や忠誠登録を強いられたらどのように感じるだろう、と今までになかった形で第二次世界大戦を考えた。その時に、私はアメリカ人として日本人に銃を向けることができるだろうか、と自分の中の日本人としてのアイデンティティを認識した。印象に残った3つの絵がどれも同じような赤にまみれ、同じように人が死に、いつの時代も戦争は変わらないと思った。

（10代女性、本学学生、奈良県）

公開記念映画上映会参加者の感想より

- 上映前の解説があったので、上映の内容がわかりやすかった。社会保障について説明や手続きをすることを、はじめかたくなに拒否していたことに、収容所生活やその後のアメリカでの生活で彼が体験したことや思いが垣間見え、根の深さを感じた。

（40代女性、会社員、京都市）

- 米山先生、和泉先生のレクチャーはとても簡潔で内容が充実していた。大学とミュージアムのコラボがまたあることを期待する。（50代女性、教育関係者、奈良県）

- リンダと会うことで、ツール・レイク時代の語り、社会保障の受給、収容所への訪問と、ジミー氏の収容所時代に対する思いの変化が見えてきました。

（20代女性、本学学生、京都市）

- 貴重な映像を見ることができ、さまざまな苦難の中、自分の美術に対する思いを曲げることなく作品を作り続けたミリキタニさんの魂に心を打たれた。

（10代男性、大学生、愛知県）

丸木スマ展 ^{いのち} ー生命をみつめてー

会 期：2013年5月14日(火)～7月20日(土)
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 2階展示室内
主 催：立命館大学国際平和ミュージアム
協 力：原爆の図 丸木美術館、有限会社流々
後 援：2013年度春季特別展と同じ



展示会場の様子



特別企画展示 丸木スマ展ポスター

立命館大学国際平和ミュージアムでは、特別企画展示「丸木スマ展 ^{いのち} ー生命をみつめてー」を開催いたしました。

1875（明治8）年、広島で生まれた丸木スマは、学校よりも野山で遊ぶことが好きなおてんば少女でしたが、22歳で宿屋と農業を営む丸木金助に嫁ぎ、以来忙しく働きながら4人の子どもの母親となりました。家業が傾き、店をたたまざるをえなくなった時は、力強く夫を支える妻であり、画家になることを目指していた長男・位里を精一杯応援する母でした。1945（昭和20）年8月6日、爆心地から約2.5キロの自宅で被爆します。早朝から建物疎開で壊した材木を大八車で自宅まで運び、一息ついてた時だったようです。家は爆風で壊れ、兄妹のように育った親戚を亡くし、夫金助は翌年にこの世を去ることになりますが、スマの家族は皆傷ついた人々の世話をし、なんとか住めるように修理した部屋も、人々に開放しました。戦後、戦地から戻った三男家族と同居するようになり、それまでのように働く必要がなくなったスマは70

歳を超えて絵を描き始めます。心から楽しんで絵を描いていることが伝わるスマの作品は、次々と出品や入選を重ねていき、81歳で亡くなるまで700点以上の作品を描いたと言われています。

今回は、特別企画展として色鮮やかな花や生き物を描いた作品や、スマ自身がみた原爆投下直後の様子を描いた作品など計12点と、スマの生前に出版された画集などの資料7点を紹介しました。「原爆は人が落とさなきゃ落ちてこん」というスマの言葉や、原爆に関する作品3点には、あの日、あの時、実際に体験した者だからこそ描かれた凄味が胸に響きました。

皆様から頂いたアンケートも、生命あるものを愛し、家族を愛したスマの人柄や原爆への強い想いが伝わったことをうかがわせるものが多数寄せられていました。

戦争という暴力の中を生き抜き、戦後「生命」を描き続けたスマの想いを汲み取り、平和をつなぐ装置として、今後もミュージアムでは様々な展示を行っていききたいと思います。

特別企画展見学者の感想より

- 今回の展示で初めて丸木スマさんを知ったのですが、こういった被爆された過去を背負いながらも絵を通して前向きに一生懸命生きる人がいたんだと思うと、その姿勢にとても感銘を受けました。（20代、本学学生）
- 中学生頃から、改めて戦争というものに向きあう機会がありませんでした。けれど、今回この展示会、丸木スマさんの作品を通して彼女の感性や、戦争を一人の女性として生きぬいてきたあかしののようなものを感じました。彼女の作品には言葉、文章には表せない戦争、これまでの日本が詰まっているように思いました。（滋賀県 20代女性 本学4年生）

- すばらしかったです。長年、念願だったスマさんの絵をようやくはじめて拝見することができ、大感謝です。かの女をはじめて知ったのは40年ほど前、母が購読していた「婦人之友」誌上でした。いつか東松山の丸木美術館へも行きたい…もっと早く知っていれば、ひとりでも多くの方にお教えできたのに、と悔やまれます。できれば、夏休み中会期があれば（ミリキタニさんも）…こどもを連れてきたかったです。ありがとうございました。（京都府 50代女性 自営業 主婦）

ロビー展示「A Picture for Peace UNOY」

会 期：6月1日(土)～6月30日(日)
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム1階
ロビー

6月1日より6月30日までミュージアムロビーにて「A Picture for Peace UNOY」を開催しました。本展示はUNOYピースビルダーズ（United Network of Young Peacebuilders）主催による写真展で、2012年9月21日に「国際平和の日」を祝して開催された国際的写真コンテストの巡回展で、優勝作品と入賞した10点の作品が世界各地で公開されることになり、国際平和ミュージアムで展示されました。

主催団体であるUNOYピースビルダーズは、若者が連携して平和、正義、連帯、人間の尊厳、環境の保全に尽力することをビジョンとして掲げています。つまりそれは、若者の平和への取り組みを、平和構築に携わる若手人材のネットワーク化につなげることで、彼らの潜在的な能力を引き出すこと、彼らの取り組みや活動がより効果的なものとなるようサポートすることを

目指しています。

展示された作品は世界の各地で撮られた写真で、被写体はいずれも若者です。そこには若い可能性が置かれている困難な状況が写し出されると同時に、未来を切り開く可能性を秘めた若者達の姿が写し出されています。

本展は「平和のための博物館国際ネットワーク」(INMP)事務局の呼びかけに応じて開催されました。



ロビー展示の様子

第8回 国際平和・人権連続セミナー ～平和の諸相を見る～

「アジアの平和に向かって～ガルトゥング博士とカセム館長の対話」を開催

4月23日(火)、立命館大学国際平和ミュージアムにて、第8回国際平和・人権連続セミナー「アジアの平和に向かって～東アジア共同体(EAC)の展望と平和研究の課題～ヨハン・ガルトゥング博士とモンテ・カセム館長の対話～」を開催しました。

現在、東アジアは、中国・韓国と日本の領土問題、北朝鮮の核保有問題など、国家間の冷戦的対立構造のくびきから脱出できず、戦争の可能性をはらむ危機的状況にあるといえます。ゲストで平和学者のヨハン・ガルトゥング博士は、かねてからEUの経験を基礎に東アジアにおける平和構想として、東アジア共同体の設立を提唱しています。そうした提案の基礎には、ガルトゥング博士の平和学があり、それはヨーロッパにおける共同体成立の歴史的過程をふまえて体系化されてきました。

今回は、国際平和ミュージアムのモンテ・カセム館長とガルトゥング博士が、東アジア共同体形成の展望とそれに貢献する実践的な平和研究について語る企画となりました。

安斎育郎・国際平和ミュージアム名誉館長(安斎科学・平和事務所所長)からの挨拶に始まり、続けてガルトゥング博士によるレクチャーが行われました。ガルトゥング博士はまず、北朝鮮を中心とした東アジアの問題に関して言及し、「確かに北朝鮮には問題がある。しかし、これを1カ国の問題として捉えるのではなく、多国間の関係性の問題として捉えるべき。関

係性の中で平和や紛争について考えることが重要であり、関係性を改善することで平和を創ることも可能」と国際的な問題を関係性の中で解決する重要性を説きました。

参加者との対話では、ピースジャーナリズムや日本における学生による平和創造運動の取り組みの重要性に関してなど、参加者から多くの質問が寄せられました。ガルトゥング博士は、一つひとつの質問に丁寧に答えられました。

最後にカセム館長から「ガルトゥング博士は平和に関する新たな方向性を示してくださいました。私たちの責務はこれを受けて行動に移すことです」と感想を述べ、盛大な拍手のなか終了しました。当日は、学生、教職員のほか、市民もあわせて97名が参加し、会場に入りきれないほどの大盛況ぶりとなりました。



(左)ヨハン・ガルトゥング博士 (右)モンテ・カセム館長

児童労働について知っていますか？

ーボーンフリーアートの活動を通じてー

開催日時：2013年6月1日 16：30～19：30
 講師：ジョン・デバラジ氏（ボーンフリーアートスクール創設者）
 通訳：中山実生氏（ボーンフリーアートスクール共同代表）
 場所：国際平和ミュージアム 2階ミュージアム会議室
 対象：大学生、大学院生
 参加者：22名
 主催：立命館大学国際平和ミュージアム
 企画：国際平和ミュージアム学生ミュージアムスタッフ
 里井 明（国際関係学部2回生）
 辻本 菜那（国際関係学部2回生）
 協力：ボーンフリーアート大阪



集合写真（中央左：ジョン・デバラジ氏 中央右：中山実生氏）

2013年6月にピースおおさか（大阪国際平和センター）に絵画「一億人の十字架刑～Art Against War」を寄贈し、講演会を行うためにインドより来日するジョン・デバラジ氏に、立命館にお立ち寄り頂き、学生ミュージアムスタッフの学習会の一環として企画を実施しました。

学生スタッフが案内するミュージアム2階の第1展示室では、“暴力と平和について考える、能力の開花をめざして”のコーナーで、児童労働に関する展示も取り扱っています。

そこで、インドの「ボーンフリーアートスクール」創設者ジョン・デバラジ氏と共同代表中山実生氏を講師に、インドにおける児童労働の実態とボーンフリーアートスクールの取り組みについて講演していただきました。アートを通して平和を実現させようとするデバラジ氏の姿に刺激を受け、新しい視点を得ることが

できました。デバラジ氏は、アルベルト・アインシュタインの言葉である、「想像力は知識よりも重要である」を引用し、「考えることをやめたら文化の貧困が生まれる、子供たちを労働から救うために、私は活動を創像する」と話されたのが印象的でした。

学生ミュージアムスタッフからも、ミュージアムでの活動や、児童労働をなくすために学生自身の行っている活動について紹介しました。また、当日はボーンフリーアートスクールの活動に参加したことがあり、今回ピースおおさかでの企画に参加する関東からの大学生の参加もあり、それぞれの経験をシェアすることで、より広い視点から児童労働について考えることができました。今回のワークショップでの学びをそれぞれの経験と結びつけて、今後につなげるため私たちに何ができるのか、具体的な行動が求められます。

2013年度 第1回 NGOワークショップ

ーアムネスティ・インターナショナルの活動ー

開催日時：2013年7月6日（土）10：30～12：00
 講師：佐野陽子氏（アムネスティ・インターナショナル日本）
 場所：国際平和ミュージアム 2階ミュージアム会議室
 対象：大学生、大学院生
 参加者：22名
 主催：立命館大学国際平和ミュージアム
 企画：国際平和ミュージアム学生ミュージアムスタッフ
 里井 明（国際関係学部2回生）、朴 世映（国際関係研究科）
 小笠原 真理（法学部2回生）、青島 佳おり（文学部3回生）
 田中 志穂（国際関係学部1回生）



講師佐野氏の話聞く参加者



佐野氏を囲む参加者

NGOワークショップは、ミュージアムで活動する学生ミュージアムスタッフが主体的に企画・実施するものです。

企画メンバーとなった学生達は、国際平和ミュージアム常設展示室「平和をもとめて」第2展示室に展示してある12のNGO団体の活動から興味・関心のある団体について意見交換を重ね、依頼する団体を決定しました。今年度前期は、アムネスティ・インターナショナル日本より佐野陽子氏を講師に迎え、児童労働の中から、子ども兵士に焦点をあてたワークショップを実施しました。今回のワークショップでは、次の4つのことを行いました。①子ども兵士に関する映像や音楽

を視聴する。②3つのグループごとに子ども兵士が生まれる原因やなぜ子どもを兵士にすることはいけないのか話し合い、発表する。③講師の佐野陽子氏より、子ども兵士の現状を聞き、子ども兵士への理解を深める。④コンゴ民主共和国政府宛に、子ども兵士に反対する手紙を書く。

今回のワークショップで深めた学びを、今後彼ら学生ミュージアムスタッフの活動の充実につなげて欲しいと思います。

「へいわ」ってなに??2013

～電気について考えてみよう!!～

日時：2012年7月26日(金) 10:00～12:00

会場：立命館大学国際平和ミュージアム
2階ミュージアム会議室・常設会場内

対象：小学生以上、保護者

参加者：39名

プログラム：120分

- ・モンテ・カセム館長によるエネルギーのお話
- ・京エコロジーセンターの方と一緒に節電や発電のしくみを学ぼう
- ・展示資料「さいころくん」を使って大学生のお兄さん・お姉さんと一緒に環境問題について学習しよう
- ・まとめ・平和へのメッセージ
- ・参加証授与（モンテ・カセム館長）

国際平和ミュージアム恒例の夏休み親子企画。今年は昨年に引き続き、エネルギーと環境問題をテーマに、電気や水について学習しました。

まず「エネルギーのお話」として、モンテ・カセム館長より、地球全体の環境問題とエネルギーがどのように作られるのかについて学びました。

次に京エコロジーセンターの新堀さん、遠藤さんと一緒に、実験装置を利用してみんなで協力して電気を作り、発電に必要なエネルギーの大きさや、普段消費している電力の大きさを実感しました。

その後、2階の常設展示室へと移動し、展示資料「さいころくん」などを使って、立命館大学の学生スタッフの解説を聞きながら、自宅における節電や節水の方法などをみんなで一緒に考えました。

そして最後にカセム館長より、この企画に参加した

子どもたちに平和や自分たちの暮らしについて学んだことを証する夏休み親子企画の参加証が授与されました。

子どもたちのから寄せられた平和へのメッセージ

- ◎発電をするのがすごく大へんな事が分かったのがんばってせつ電しようと思います。ダイヤモンドは、化石燃料から出来る事が分かったのですごい!!と思いました。
- ◎私は、いつもせんぷうきをつけています。けれども、つかわないときでもつけているときがあります。今日、教えてもらって、私は、とても恵まれているんだなあと、わかりました!! 水の使い方も考えてみるようにします。

参加した保護者の方々からの感想

- ◎親が言っても伝わらないことを丁寧に理論的に実践的に学ばせて頂きました。
- ◎普段見過ごしがちなことを知るいい機会となった。夏休み明けから始まる平和学習の前準備となった。カセム先生のお話楽しかったです。



カセム館長のお話



学生スタッフによる展示解説

ミュージアムで「キャンパスアジア・プログラム」研修を実施

立命館大学文学部、広東外語外貿大学（中国・広州）、東西大学校（韓国・釜山）の学生28名が、東アジアの次世代のリーダーを育成することを目的に、3カ国を移動しながら学ぶ「キャンパスアジア・プログラム」の2学期が5月から日本で始まりました。

「キャンパスアジア・プログラム演習」では、母語が異なる学生どうしが、東アジアについての文献・資料を収集、分析し、その内容をまとめ、東アジアの諸問題について討論できることを到達目標にしています。この授業では歴史認識などで対立する各国の状況についても討論し、それぞれの国の歴史について共に考える場となっています。

6月22日(土)午後、国際平和ミュージアムの展示室において、研修が行われました。

展示概要についての解説を受けて、地階展示室のテーマ「兵士と戦争」から「現代の地域紛争」まで、混成8グループにわかれ、割り当てられたコーナーで、どのようにガイドをするか準備をしました。準備が整ったのを見計らって、グループごとに各自が得意な言語でガイドを行いました。

ミュージアムの展示内容に即しながら、東アジア近現代史についての解説を合同で発表するグループもあり、それぞれ工夫を凝らし思い思いのガイドを行いました。「同じ歴史事実でもその歴史認識は異なり、相手の国の歴史も知り、相手の話を聞くことが大事」だと、感想を述べる学生もいました。言葉も文化も異なる3カ国の学生たちが話し合い、助け合い、異文化コミュニケーションを深めるなかで、強い信頼関係と深い友情が育まれていることがガイドの様子からも伺えました。

立命館大学でのプログラムは8月上旬まで続き、9月から釜山、東西大学校で3学期が始まります。来年2年目に日本へ戻ってくる時の彼らの成長に、大いに期待しています。



展示室でのガイドの様子

ボランティアガイド養成講座修了式・ボランティアガイド学習会を開催

2013年2月に開始した第8回ボランティアガイド養成講座の修了式が、4月13日（土）に開催されました。今回のボランティアガイド養成講座では、19歳の大学生から最高齢81歳になる22名の受講生の皆さんが修了されました。

修了式では、修了証書授与の後、モンテ・カセム国際平和ミュージアム館長および山根和代副館長から祝辞が送られました。安斎育郎名誉館長からはお祝いのメッセージとともに、修了者ひとりひとりへ手書きの絵手紙が送られました。

修了式とその後開催された交流会には、現役のボランティアガイド約20名のみなさんが参加され、ガイド養成講座を修了された皆さんをお祝いするとともに、なごやかな雰囲気懇談が行われました。修了されたガイド養成講座受講生の皆さんは5月から3か月にわたって実地研修に参加され、秋から本格的にガイドとして活動を行います。

さらに5月18日（土）には、ボランティアガイド学習会を開催しました。これはガイド活動をより良く行っていくための学習会で、現役のボランティアガイドのほかにガイド研修生、学生スタッフなど58名が

参加しました。

講師に安斎育郎名誉館長をお迎えし、「立命館大学国際平和ミュージアムのガイドとして活動すること」と題して講義が行われました。その後に質疑応答があり、日頃のガイド活動を行うにあたって注意しなければいけないこと、見学者によりよく理解してもらうためにはどうすべきかなどについて熱心な議論が行われました。

国際平和ミュージアムでは、今後も引き続き、ガイド活動の一助となる時宜を得たテーマでの連続学習会を、開催していく予定です。



ガイド養成講座修了式後の交流会の様子

2012年度 資料・図書などの寄贈者一覧

2012年度は、以下の方々から資料や図書などをご寄贈いただきました。
お名前を記し、感謝の意を表します（敬称略・50音順）。

資料

芦田繁
井上大蔵
井上二三子
大木綾子
大城敏雄
音川百合子
加藤類子

狩野栄三
北林稔
君島真理子
栗原尚美
小西康夫
坂田年
坂本悠一

志賀庄一郎
島影美鈴
鈴木早代子
高畑かずこ
中野由記子
藤川初子
藤田貞代

松岡正樹
森島貴子
柳原功
吉原良雄
米倉正裕
四方てる子
企業組合プロダクション・スコーポ

図書

青柳敦子
安斎育郎
飯田勇
石田祐子
伊藤昭
岩井忠熊
穴戸和子
岡本貞雄

沖村舞葉
音川百合子
桐畑米蔵
齋藤英子
高木敏子
田中栄治
辻陽子
寺内邦夫

寺島善一
柄尾昌子
鳥井真木
中元輝夫
野崎朋子
服部素
東山幸弘
日野雅之

平田龍幸
平野文子
藤岡惇
三井てる子
村尾孝
村上登司文
森岡純子
山根和代

山辺昌彦
吉田真知子
米倉正裕

団体 118団体

※以上、掲載の許可をいただいた方々につきまして、お名前を掲載いたしました。

第7回 対馬丸記念館



日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE

日本平和博物館会議（ロゴマーク）

■ 数少ない子どもの平和記念館

国が命じた学童集団疎開の子ども達を含め一度に1,500余名が犠牲になった対馬丸事件を通して、子どもと戦争、そして平和について取り上げております。忘れてはならないこの歴史と教訓を伝え、慰霊とともに子どもたちがより良く生きていける社会の実現に向け平和発信に努めています。

1,700名余の学童を中心とした疎開者、乗組員を乗せて沖縄から長崎に向かった対馬丸は、トカラ列島悪石島の近くで、1944年8月22日午後10時過ぎ、米潜水艦の魚雷攻撃で撃沈されました。平成9年に水深870mの海底に沈む対馬丸の船体が確認されたが、引き揚げることは不可能な状況にあり、犠牲者は今も深い海底で眠ったままです。

対馬丸記念館は、対馬丸へ乗船するイメージで作られた建物で、屋上までの高さを対馬丸の吃水と同じ約10メートルにし、館入口は、タラップから乗船するイメージで、あえて2階に作ってあります。



対馬丸記念館

■ 第一展示室（2階）

テーマを「対馬丸が撃沈された事件とは」として、時間軸に沿って、疎開命令から乗船、航行、撃沈、漂流そして救助までを証言と資料で展示しています。この一連の流れを通して見たとき、対馬丸が撃沈されたことは単なる戦時の犠牲ではなく、沖縄が戦場としてのみ込まれていく象徴的な事件として捉えることができます。対馬丸とは別の船で運ばれたために親元に返ってきた、犠牲になった姉妹のランドセル、漂流した筏の模型、撃沈された後、事件については「けして語ってはいけない」と厳重な箝口令が敷かれた証拠になる手紙、テーマ映像「海よいのちよ」を放映します。

■ 第二展示室（1階）

テーマを「生きていたきみをわすれない」として、犠牲者名を刻名してあるコーナーでは、犠牲になった学童が、せめて学び舎や故郷の写真に抱かれてほしいという願いを込めて、刻名の背景として学校、地域ごとに当時の写真を

配してあります。刻名板と向かい合わせに、生存者が証言した事件後の苦悩をクローズアップしてあります。犠牲者と生存者双方にとって、事件そのものが悲劇であることが分かります。証言や映像の視聴が出来ます。

子ども達の遺影や遺品を展示してありますが、犠牲者の多さに比べ遺影、遺品が少ないのが現状であります。事件後、厳重な箝口令が敷かれたこと、犠牲になった学童の8割は那覇の子どもたちであったが、事件から49日後には十・十空襲で那覇の町が焼け出されたこと、犠牲者に気遣って生存者やその家族が、事件を封印していたこと等があるため、対馬丸事件の資料が少ない原因となっています。

遺影や遺品は子ども達の生きた証であり、家族や友人を失った人々の大切な思い出です。残された遺影や遺品に込められた様々な思いに触れてほしいです。対馬丸を平和の道しるべとして現在、活動している児童の活動も展示しております。

犠牲になった子ども達の持っていたであろう未来への「夢」その「夢の未来」に私達は生きています。今を生きる私達は、波間を漂う犠牲者の魂にどうこたえることが出来るのでしょうか。

■ 語り部活動

生存者や遺族を中心とした語り部活動を行い、県内外の学校や施設などに語り部を派遣しております。

■ 英語遊び及びつしま丸児童合唱団

子どもたちの感性を高め、学年や学校の違う団員が、違いを認め合う寛容の心を養うと共に、対馬丸記念館を自分の館として身近に思ってもらうために、昨年、合唱団を結成し、団員30名で土曜日（4回/月）に英語遊びと合唱団活動を行っております。

■ 小桜の塔

記念館から徒歩3分、対馬丸の子ども達を中心に祀った慰霊碑「小桜の塔」があります。慰霊をしながら心の中で平和の誓い等を語ることによって、対馬丸の子どもたちからパワーを貰い、改めて命の尊さ、平和の大切さを学ぶことが出来ます。

基本情報

- ◆館長 宮城 清志
- ◆住所 900-0031 沖縄県那覇市若狭1-25-37
- ◆電話 098-941-3515 / ファクス 098-863-3683
- ◆ホームページ <http://www.tsushimamaru.or.jp>
- ◆開館時間 9時～17時(入館は16:30まで)
- ◆休館日 毎週木曜日・年末年始
- ◆入館料 一般・大学生 500円
中学生・高校生 300円 小学生100円
(団体20名以上) 10% OFF

ボランティアガイドに参加して思うこと

立命館大学国際平和ミュージアム

ボランティアガイド・平和友の会 関谷 真樹

■ その1 「アンネのバラ」のこと

今年の5月、ミュージアム正面玄関前の「アンネのバラ」が温かい陽の光の中、例年にも増してたくさんのお見事な花を咲かせました。赤からオレンジそしてピンクへと色が少しずつ変化していきます。花の中でも特にバラが好きだったアンネ。そんなアンネのために、ベルギーの園芸家は品種改良して作ったバラに「アンネ・フランクの形見」と名づけ、アンネの父オットーに捧げられ、その後平和のシンボルとして、世界中に広まりました。ミュージアムの開館に際して、嵯峨野教会より株分けされた「アンネのバラ」です。

あまりに見事に咲きそろったので、中学生のグループにガイドする時、はじめにみてもらいました。ユダヤ人というだけで捕われ、15歳でナチスの強制収容所で短い命を落とすことになったアンネ。「アンネの日記を読んだことある人？」と聞いたら、グループのうち2人の女の子が手を上げてくれました。「他の人も世界記憶遺産にもなっている『アンネの日記』を読んでみようね」と声をかけ、地下の15年戦争の展示ガイドの後、アウシュビッツ・ビルケナウ収容所の写真に移ります。線路はなぜあるのかー収容者を運ぶために一牛や馬を運ぶ貨車で運ばれてきた収容者は選別されます。子ども、病気の人、身体の不自由な人は射殺かガス室への運命をたどります。アンネもこの収容所に連れてこられたのですが、さらに他の収容所へ送られ短い命を閉じます。

続いて「激しい調子で人々を煽動するヒトラーとホロコースト」の映像の前で、子どもたちは息をのみます。こうした「人を人として扱わない」人道に対する罪には「時効は無い」として今もドイツはナチスの戦争犯罪の追及を続けていることも伝えます。同時に「今を生きる私たちは歴史にどう向き合うべきなのか」を考えさせられます。以前、ガイドした小学生たちに「うちの学校にもアンネのバラが植えてあるよ」と教えてもらい、アンネのバラに込められた平和への思いの広がりを感じました。

■ その2 伊江島の核模擬爆弾

核兵器のコーナーで高校生のグループにポイントガイドをした時のこと。ちょうど彼らの目の前の爆弾を見て、「これ何の爆弾かわかる?」「さあ…」「これは原

爆みたいな核兵器を落とすための訓練用の模擬の爆弾やで」「へー」1つ1つ声に出して反応してくれます。「これはどこに落ちていたものでしょう?」「さあ…ひょっとして沖縄?」「そうなんや。沖縄本島の北西にある伊江島で見つかったものやで」ちょうどベトナム戦争の最中に核兵器使用を検討していた米軍が訓練用に使用していた核模擬爆弾の落し物です。「ところで今、核兵器を持っている国ってどこ?」「北朝鮮(朝鮮民主主義人民共和国)」「他には?」「さあ…」ここで止まってしまう。「ここちょっとみてくれる」展示の核兵器保有国と保有数について見ます。「はじめに原爆を開発したのはアメリカ。広島、長崎に落としました。つづいて旧ソ連、今のロシア。そしてイギリス、フランス、中国…」と続けていくと「えーそうなん」という声。そして最後に核実験に従軍したアトミック・ソルジャーの放射線被害の写真、それまで黙っていた女の子が「これってひどいんちゃうの」と怒り。(アメリカの水爆実験の「死の灰」を浴び亡くなった久保山愛吉さんのこともふれたかったのですがここで時間切れでした)

人類を破滅に追い込む核兵器の存在。その放射線被害に今も苦しむたくさんの被爆者の方々の思い。そうしたものを受け止め、福島原発の事故被害にあえぐ人びとにも思いをはせながら、人類の死活的課題である核兵器廃絶への誓いを新たにしましたガイドでした。

■ その3 大学生のガイドを通して

大学1年生8人グループのガイドを終えて、感想を聞かせてもらいました。「学ぶということの楽しさを知ることになった」という声でした。率直な感想だと思いました。「最近の若い世代は常識がない」といわれることも多いようですが、彼らとの対話型のガイドの中で感じたことは、「知らないことは恥ずかしいことではない。知らないと言えることが新しい学びにつながる」というこちら側の心を開いたスタンスが大切だということです。これまで学生たちに伝え切れていない大人の側の責任、社会や教育、ジャーナリズムのあり方もふくめて考え、彼らと共にミュージアム展示から「平和創造のための新しい発見」を共有できるようなガイドのあり方を追求し、そのための努力が求められていることを改めて確認する場となりました。

常設展示見学者の感想 (2013年4月～7月)

戦争は無い方がいいことを誰もが知っています。でも、世界中で戦争が続いています。戦争をしたくない人でさえ、せざるを得ない状況に追い込まれてしまう。あやうい日本、世界に視野を広げ、多様な人たちも受け入れることから対立する状況も知り、共有する世界にして欲しいです。

男性 50代 大阪府

学校の授業で習ったところもあったが、学校では学べないところまで詳しく深く学べたのでとてもよかったと思います。戦争の影響でたくさんの子供が被害にあっているということに驚きました。皆が戦争の恐ろしさを理解して、戦争が起こらない世の中になっていけばいいなあ今日訪れてみて思いました。

男性 中学生 神奈川県

1985年に立命館大学を卒業しました。客観的な資料が、最後の憲法前文でまとめられ、感動的でした。改めて読んで、戦争の惨禍を踏まえてのもの、人類の英知の結晶の感を深くしました。

男性 50代 福岡県

戦争がどれだけしてはいけないことが良くわかった。平和がつづけばいいなって思わせてくれた。

女性 中学生 大阪府

昔があって今があるという事の一つとして戦争の事はすごく大事だと思います。

女性 40代 京都府

国会で憲法の見直しを叫ばれている今日、是非このミュージアムを全国民に。見て、色々和日本・世界がくり返してきたあやまちについて、再考してほしいと思います。

女性 50代 千葉県

改めて戦争の無惨さ、恐ろしさを痛感し、1日も早く全世界から戦争がなくなり、真の平和が訪れることを強く願います。立命館の学生（私の子どもも含め）にもぜひここを見に来てほしいと思います。帰って話もしようと思っています。

女性 50代 大阪府

世界の紛争・戦争の現実とその原因がわかりやすく展示されていてとても良い内容だと思います。このようなミュージアムが存続してほしいと思います。

女性 50代 大阪府

自分の知らなかった戦争のことについても知っている戦争のこともよく知れて、とても良い経験になりました。戦争のつらさなどがとても伝わってきました。

女性 中学生 大阪府

日本の昔の戦争の歴史から今の世界での戦争に対する活動までを見ることが出来て、ただ単に昔の残こくな歴史を知るだけではなく、今私達が何を考えるべきかがわかった。学校とかで団体で見学しに来たりしたいです。

女性 高校生 京都府

1つ1つの展示に詳しい説明があって学べる点がいくつもあった。戦争の恐ろしさを改めて感じることができました。今後も戦争について深く考えて、今自分に何ができるか考えて行動していきたいと思います。

男性 中学生 神奈川県

戦争とは何かをここへきて初めて知った。私と同じ年の人が戦争へ行っていたことが分かってしょうげきのだった。私は平和なときに産まれてよかったなと思った。まだ他の国は戦争があるところがあるので、残念な気持ちだ。

女性 中学生 京都府

本物がたくさんあってよかったです。いろんなことを知ることができました。世界のみんなが平和で仲良く暮らせますように!!

女性 中学生 大阪府

いろいろなものがみれて良かった。修学旅行で無理に来ないと!と思っていたが、とても良かった。次は個人で2階(「平和創造展示室」のこと)とかも行きたい。

男性 小学生 岡山県

昔の出来事や、その当時の人々の暮らしなどを知れたりもできた。人々の思いも少し伝わってきたし、こんな事はしてはいけないということがわかった。

男性 中学生 神奈川県

※掲載にあたり一部の表記を改めました。

2012年4月
～2013年3月

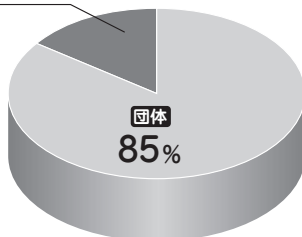
入館者状況

◎開館日数

294日

<有料団体・個人入館者状況>

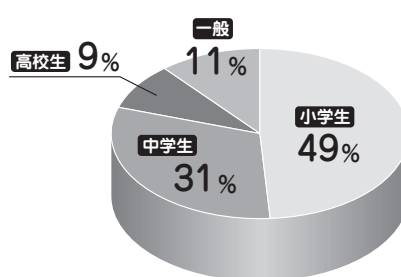
個人 15%



◎オープン後常設展入館者数累計

844,249名

<有料団体入館者数状況>



2012年度	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	人数計(名)
総入館者数		2,286	6,336	4,901	2,907	2,441	3,000	12,260	8,509	3,244	1,498	1,813	1,038	50,233
来館80万人		2012年5月22日 来館者80万人												
特別展	春季特別展 『放射能と人類の未来』	会期：5/15～7/27												9,691
	特別展 『世界報道写真展2012 -WORLD PRESS PHOTO 2012-』	会期：9/19～10/14												6,632
	京 都 (立命館大学衣笠キャンパス)	会期：10/16～11/1												2,303
	滋 賀 (立命館大学びわこ・くさつキャンパス)	会期：11/4～11/18												2,672
	大 分 (立命館アジア太平洋大学)	会期：10/23～12/1												12,489
	秋季特別展 『未完の作品／永遠のはじまりー「無言館」収蔵作品から芸術の原点を考える』													33,787
	小 計													33,787
特別 展示	華道家元池坊×立命館大学国際平和ミュージアム特別展示“平和の祈りを生ける”	(8/2～8/7)												オープン
	【広島会場】(広島県民文化センター) 第58回広島平和美術展に出展	(10/7～10/9)												オープン
	【東京会場】(東京ドームシティ プリズムホール) 第20回8・15国際平和美術展に出展	(10/3～11/25)												ー
	京都・大学ミュージアム連携「大学は宝箱！～京の大学ミュージアム収蔵品展」(京都大学総合博物館) に出展													ー
特別協力	「写真報告3・11 赤浜」撮影 菊地公夫 (国際平和ミュージアム 1階ロビー)	(9/15～10/12)												オープン
講演会 ほか	立命館大学国際平和ミュージアム20周年記念式典 (国際平和ミュージアム 1階ロビー)	(5/19)												218
	「平和への信念-中野信夫の足跡」展 (国際平和ミュージアム 1階ロビー)	(5/19～6/17)												オープン
	来館80万人記念セレモニー (奈良市立富雄第三中学校2年生 69名)	(5/22)												ー
	「放射能と人類の未来」公開記念講演会 (衣笠キャンパス 創思館カンファレンスルーム)	(6/10)												184
	安斎育郎名誉館長「放射能リテラシーのすすめ」													
	「放射能と人類の未来」公開記念講演会 (衣笠キャンパス 充光館301号教室)	(7/14)												78
	豊田直巳氏 (フォトジャーナリスト)「イラクからフクシマへ～放射能汚染地帯を歩いて」													
	夏休み親子企画「へいわ」ってなに？？2012 (国際平和ミュージアム 2階会議室)	(7/26)												26
	小・中学校教員対象下見見学会	(6日間：7/25、7/27、8/17、8/22、8/23、8/24)												38
	世界報道写真展オープニングコンサート (国際平和ミュージアム 1階ロビー)	(9/19)												65
	NOUN YA (ヌン・ヤ)：フルート (ナイスム・ジャラル)、ウード (ヤン・ピタール) のユニット													
	「世界報道写真展2012」公開記念講演会													
	恒成利幸氏 (朝日新聞社)「東日本大震災～そして現在 そこから見えること、考えなければならないこと」													
	【京都会場】衣笠キャンパス 以学館4号教室	(10/9)												184
	【滋賀会場】びわこ・くさつキャンパス エポック立命21ロビー	(10/16 1日2回実施)												84
	「未完の作品／永遠のはじまりー「無言館」収蔵作品から芸術の原点を考える」公開記念講演会													180
	鼎談「「無言館」のこと」野見山曉治氏 (洋画家)×窪島誠一郎氏 (「無言館」館主)×安斎育郎名誉館長													
	開設20周年記念国際平和シンポジウム「平和研究所の軌跡・課題・可能性」(創思館カンファレンスルーム)	(11/30)												80
	第8回ボランティアガイド養成講座 (全8回) (国際平和ミュージアム 2階会議室)	(2/17～3/17)												27
	開設20周年記念学生企画「Forum for Peace Making (学生平和フォーラム)」(国際平和ミュージアム 2階会議室)	(3/17)												76
	小 計													1,240

編集 後記

「立命館大学国際平和ミュージアムだより Vol.21-1」を読んで、読者は多くのことを学ぶことができ、また意外な発見をするでしょう。安斎育郎名誉館長の「水は低きに流れる」では、福島での被曝状況について科学的データに基づいて考えることが大切であることが指摘されています。環境工学を担当されている神子直之先生の「心に平和をもたらすもの」では、音楽の力について考えさせられ、そして神子先生がジャズピアニストとして活躍されている意外な側面を発見することでしょう。メディア資料センター長の赤沢真世先生の書評を通して、貴重で魅力ある書籍やビデオがたくさんあるメディア資料センターへ行ってみたいくなるでしょう。

特別展「ジミー・ツトム・ミリキタニ回顧展一日系人強制収容所と9.11を体験した反骨のホームレス画家」と特別企画展示「丸木スマ展」では、「絵画をみて感動し、戦争や人権について考えさせられた」という感想が載せられています。また海外の平和博物館で展示されている若者の写真展についての解説も注目に値します。

平和学のヨハン・ガルトウング博士の講演とモンテ・カセム館長の対談など、平和研究の充実した取り組みもありました。また改めて多くの人々が様々な活動をしていることがわかります。学生が取り組んだ「Artによって児童労働をなくそう！」や児童労働に関するワークショップ、ボランティアガイド養成講座など、多彩な活動がありました。

ミュージアム収蔵品である「愛国いろはかるた」が、わかりやすく解説されています。今後も充実した取り組みをしていきたいと考えています。

山根和代

※ 本誌に掲載されている情報・写真等の無断転載はご遠慮ください

ミュージアムインフォメーション

世界報道写真展2013 ~WORLD PRESS PHOTO 2013~

開催趣旨

世界報道写真展は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している「世界報道写真コンテスト」の入賞作品約160点で構成した写真展で、今年で56回目を迎えます。1年を通じて、世界の約100会場で開かれる本展は、約200万人が来場する世界最大規模の写真展です。写真を通して、広い世界で起きている現実を見つめ、人々の声なき声、ニュースでは流れなかった知られざる事実、さまざまな出来事の新たな側面を見て、いま一度平和とは何かを考えるきっかけにさせていただきたく開催するものです。

京 都

会 期：2013年9月18日(水)～10月13日(日)
※休館日：9/24(火)、9/30(月)、10/7(月)
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール
開館時間：9時30分～16時30分（入館は16時まで）
参 観 料：大人500円、中高生300円、小学生200円

公開記念講演会

日 時：2013年10月1日(火) 13:00～14:30
会 場：立命館大学衣笠キャンパス 明学館94号教室
講 師：会田 法行氏（フォトグラファー）



「世界報道写真大賞」
ポール・ハンセン（スウェーデン/2012）
パレスチナ・ガザ地区で、イスラエル軍のミサイル攻撃によって死亡した兄弟が葬儀のためにモスクへと運ばれてゆく

滋 賀

会 期：2013年10月15日(火)～10月31日(木)（会期中無休）
会 場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス(BKC) エポックホール
開場時間：9時30分～16時30分（入場は16時まで）
参 観 料：大人500円、中高生300円、小学生200円
公開記念講演会
日 時：2013年10月22日(火)
第1回10:40～12:10、第2回13:00～14:30
会 場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス コーニングハウスI C303号教室
講 師：会田 法行氏（フォトグラファー）



会田法行氏

（京都・滋賀開催分）

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、朝日新聞社、世界報道写真財団
後 援：オランダ王国大使館、公益社団法人日本写真協会
公益社団法人日本写真家協会
京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会
京都市内博物館施設連絡協議会
NHK京都放送局（衣笠キャンパス開催分）、KBS京都
滋賀県、草津市、大津市
滋賀県教育委員会、草津市教育委員会、大津市教育委員会
NHK大津放送局（びわこ・くさつキャンパス開催分）、びわ湖放送株式会社
協 賛：キャノンマーケティングジャパン株式会社

大 分

会 期：2013年11月3日(日)～11月17日(日)（会期中無休）
会 場：立命館アジア太平洋大学（APU）本部棟2階 コンベンションホール
開場時間：10時～17時（入場は16時30分まで）
参 観 料：大人500円、高校生以下無料
主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、立命館アジア太平洋大学、朝日新聞社、世界報道写真財団
後 援：オランダ王国大使館、公益社団法人日本写真協会、公益社団法人日本写真家協会
協 賛：キャノンマーケティングジャパン株式会社

講師略歴

96年5月、米・ミズーリ大学ジャーナリズム学部報道写真学科卒業。
96年8月、朝日新聞社写真部に入社。02年の日韓W杯サッカー、帰国した拉致被害者などを取材。
03年8月、独立しフリーの報道カメラマンに。パレスチナやイラク、広島・長崎などで長期的なドキュメンタリーに取り組み、国内外の媒体で発表。現在は「水」をテーマに取材している。
08年より、早稲田大学政治学大学院ジャーナリズムコースで非常勤講師もつとめている。

● 詳細はホームページでお知らせいたします。

ミュージアムインフォメーション

2013 年度秋季特別展

目・耳・WAR—総動員体制と戦意高揚

会 期：2013年10月23日(水)～12月15日(日)

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール

休 館 日：月曜日

参 観 料：大人400円(350円)、中・高生300円(250円)、小学生200円(150円)

※常設展もあわせてご覧いただけます。上記()内は20名以上の団体料金です。

※関西文化の日 11/16(土)・17(日)は入場無料です。

開催趣旨

1937(昭和12)年に日中戦争が始まると、総力戦体制に向けて国民を動員するための宣伝活動が活発になりました。当時の先端的なデザインや技法を駆使した宣伝は、視覚、聴覚に訴えて当時の人々を戦意高揚に駆り立てる感性装置でした。

本展では、戦時ポスターやチラシなどの視覚資料を中心に、軍歌や歌謡曲などを収録したSPレコードやラジオ放送などの聴覚資料、子ども向けの玩具など、感性に訴えかける歴史資料を展示します。

この展示を通して、現在にも続く情報による嗜好の操作について考え直す機会となることを願って開催いたします。

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム

展示協力：京都工芸繊維大学美術工芸資料館

後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会
京都市内博物館施設連絡協議会

NHK京都放送局、KBS京都

朝日新聞社、京都新聞社、毎日新聞社、読売新聞社



ポスター「支那事変国債」



ポスター「貯蓄 二百億の力」

関連企画

参加無料

●学芸員による展示解説(約30分)

11月16日(土) 13:00～、15:00～

17日(日) 13:00～、15:00～

第81回ミニ企画展示

●「平和をつむいで20年」

会 期：9月14日(土)～10月6日(日)

主 催：平和友の会

共 催：立命館大学国際平和ミュージアム

結成20年を迎える「平和友の会」の活動の歩みを展示

第82回ミニ企画展示

●「第7回立命館附属校 平和教育実践展示」

会 期：10月13日(日)～12月20日(金)

立命館中学校・高等学校/立命館宇治中学校・高等学校/立命館小学校

立命館守山中学校・高等学校/立命館慶祥中学校・高等学校

※会期中、上記の順で展示を行います。

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、立命館附属校

●詳細はホームページでお知らせいたします。

第21巻第1号(通巻59号) 2013年8月23日発行



立命館大学 国際平和ミュージアムだより

編集・発行

立命館大学
国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL. 075-465-8151 FAX. 075-465-7899

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/index.html>